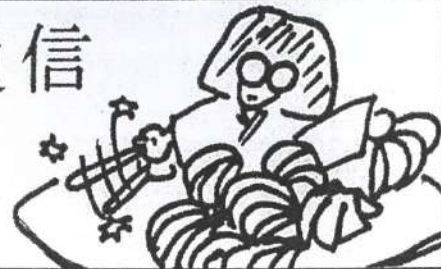




大道芸

通信



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeikib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

親孝行

生業の中でも珍しいもの変わったものは勿々あるものではない。一般論としてはそうであろうが、藩政時代には思いのほか多く見つかる。親孝行などもそのひとつであろう。親孝行が何で生業になるのか現在ではよくわからないが、そこそこ実入りがあったようで、諸書が取り上げている。

左図は『吾妻余波』^{あづまのなごり}「親孝行」及び『東都歳事記』「盆中往来」に描かれたものの一部を拡大したものであるが、国会図書館デジタル文庫が公開し誰でも見ることが出来るものには、朱書きで書き込みした輩がいる。国会図書館が購入したときには既に書き込みが済んでいたと思いたい。

親孝行

『吾妻余波』



親孝行
(『東都歳事記』盆中往)



親孝行(『東都歳事記』)

前の負ふ者は仮設

そうは思うが、誰かに売りこの画では、おぶわれて居通すのである。呼び声は「親渡すものに、わざわざ書ききるであろう婆さんの下半身孝行 親孝行でござい 一銭込みをする必要はない。多が見当たらない。それで『吾恵んで下されや』的なもので分知識をひけらかしたかつ妻の余波」が載せるものをあつた。

途河婆々前の負ふ者八仮設 全体としては母親を背負とある。「ソウツカババア前つた息子という設定である。の 負ふ者は仮設」と読まつまり、孝行息子が母親を正しかつたと思える。それが背負っている姿である。なものは画から連想した単ていいるのは、婆さんが左手に提げなる思いつきではない。正ていいるのは、銭(ぜに)緒(さど)著名だつたようである。

幾世餅は、諸書や随筆に取り上げられているほど、藩政時代には、一世を風靡した。現在では勿論ないが、当時はその製法を真似たものがあるほど

幾世餅

幾世餅は、諸書や随筆に取り上げられているほど、藩政時代には、一世を風靡した。現在では勿論ないが、当時はその製法を真似たものがあるほど

は左記のように記す。『根元は兩國橋西詰にあり 前は鉄砲町に住して すこしき餅を商ふ 此者の妹にかもんと云あり この女の夫は蔵駅の某にて大百姓なり 渠と示し元禄十七(1730)年にはじめて郭をかまふ

其餅甚美味にして榮ふ 今所々にこの名あるは これに准もの也 何ゆ名付たりや』(『近代世談綺』)



右に対する回答?ではないが、『江戸一番の看板 両国橋の幾世餅 小松屋喜兵衛といふ元は橋本町にて車力頭なり 上野中堂御普請の時分金を出し 名代幾世といふは吉原河岸にて女郎なり 名を